

吉岡美国と敬神愛人（1）

— 吉岡美国受洗以前 —

井上琢智

I はじめに

一九四七（昭和二三）年年末から風邪のため臥せていた名誉院長吉岡美国の容態は翌年二月になると悪化し、二月二五日夜には「あの慈愛に満ちた温顔が、天国昇天への厳肅な形相に打変り、附添う夫人はじめ家人一人々々に別れの言葉をのべ、最後に、学院のために、と特に感謝の祈禱を捧げ」た。翌二六日午前一時二〇分「先生は、静かに、平安裡に昇天した。享年八七——悲しい文字が、みんなの頭の中に淋しく残った。この年末△一九四七年▽には、ダイヤモンド婚の祝福を受け、また翌年△一九四八年▽には米寿の慶びを重ねる予定の先生であった^①」。

二月二八日には、家庭葬が行なわれ、翌二九日に関西学院葬が商学部礼拝堂で行われた。学院を代表した曾木銀次郎の弔辞の後、同窓会を代表して、同窓生で、法文学部教授であった竹友席雄（藻風）が弔辞を読んだ。吉岡先生は「盛徳高大、寿福豊か」であり、「厳父の威と慈母の愛

を兼ね備へた教育家であり謙虚清廉の君子であり敬天愛人を身を以て行はれたキリスト教徒」であり、「ジェントルマンの節操と礼儀」を説いた人物であったと。⁽²⁾

吉岡美国に教えを受けたものにとって、彼は「自愛の念に充ちたる人」(二三)⁽³⁾、「偉大な人格者」「人格の全部はキリスト教の精神を根本とし、キリストの教えを先生の全生涯を通してそのまま日常生活にまた校庭において実行された」人、「個人の自由を尊ぶ精神、神を畏れ、隣人を愛する博愛の精神、つまりて、なお且つ、立ち上がる旺盛な向上進歩の精神」を説く人、「慈父」(二三―一五)、『ことを隠すのは神の誉れ、／＼ことを極めるのは王の誉れ。／＼天の高さと地の深さ、／＼そして王の心の／＼極め難』(箴言：二五―二・三)「き人(二八)」、「よく理の分つて呉れる親爺」(二五)、「謹厳、厳粛、敬虔、至誠の一面に温情と至愛とをもって徹頭徹尾、学院とその学生生徒のために全生涯を捧げ尽した」「神を畏れ神の産み給える人を愛する人」(四九―五〇)、「儒者的風格の紳士」「東洋君主国の紳士」(七七―七八)、「愛の使徒、誠実の教育者」「イエス・キリストを胸に宿された真の基督者」(九三)であった。

また、吉岡の教え子で後に本学の理事長になった木村蓬伍は「先生を評する者で、先生は旧型の封建性を強く打ち出した方だという者がある。そう私も思う。しかし、先生は封建性の良いもの、尊いものを、効果的にうち出された：心に満ちている真実を健実に実践躬行された。そこに、日本文化に培われた先生のなかに、基督の福音に聖化された美しい性格をみるのである。先生は武士精神を重んじ、儒教の教えを尊ばれた。志操堅く、実行に忠実であった。：先生は若い日には、直接、福音宣教の御用に立たれたことがある。老年になられては、あまりに神を語られず、基督を口にされなかった。然し、身をもって、神の愛を示し、生活を通して基督の心を

証された。そうした型の人を育てるために一生をささげられた⁽⁴⁾」。

さらに、吉岡の教え子で戦後中学部長となった矢内正一も「日本人としての背骨を持ちながら英語は西洋人以上といわれ、キリスト教はその精髓を体得していられた」し、「外国のよいものを取り入れて、悪いものはとり入れられず、日本の悪いものを捨てて、よいものをはっきりと持つておられる日本人キリスト教徒として、先生に対しては日本人も外国人も尊敬の念を持たざるを得なかった⁽⁵⁾」。

このような吉岡評は、同僚の宣教師にも共通するものであった。第七代院長となったアウターブリッジ (H.W. Outerbridge 在任期間：一九五四・四―五六・五) もまた、吉岡を「キリスト者紳士としてのもっとも高い資質を持った」人物であり、「忠誠の点でも個人的資質の点でもまさに日本人でありながらも、その日本人としての資質と西洋のキリスト者のもっとも優れたものとを合わせ持ち、つまり、それぞれ資質のもっとも優れたところを彼の個人的資質の中に一体化させていた人物」であったと高く評価した(一八一―一九)。また、第四代院長ベーツ (C.J. Bates 在任期間：一九二〇・一〇―四〇・九) は吉岡を「武士道とクリスチャニティーのもっとも高貴な徳を合わせもち、真のクリスチャンの武士であった」と指摘した⁽⁶⁾。

このように吉岡は、教え子による思い出や多くの逸話を通じて、そのキリスト教教育の優れた実践者として高く評価されてきたものの、その著述の少なさゆえに、彼のその教育実践の基礎となった彼のキリスト教信仰・思想⁽⁷⁾さらには教育思想の内容が明らかにされることは少なかった。本稿では、このような吉岡の教育実践の基礎となった思想を明らかにするための試論である。そのため、本稿は、吉岡自身がしばしば揮毫し竹友など教え子が指摘したように彼のキリスト教

思想・教育の指針となった「敬神愛人」もしくは「敬天愛人」という言葉と高等商業学校などでの「国民道德」の講義草稿を取り採げる。まず最初に、その準備作業の一つとして吉岡の生涯をたどることから始めよう。

Ⅱ 吉岡美国の生涯（１）

一 京都時代

文久二（一八六二）年九月二六日^⑧、吉岡は京都市上京区衣棚通丸太町上ル今薬屋町七番^⑨で父鋳次郎（美種）、母幾久子の長子として生まれた。家は代々町奉行所属の同心で、祖父英和（清了）は「勤皇の志厚」い人物であったという。美国の幼名は岩三郎^⑩であった。家は代々浄土宗で、幾久子の実家は日蓮宗であり、幾久子は熱心なその信仰の持ち主であったという。吉岡の最初の教育は寺小屋で習字・漢籍の素読であった。

当時明治三（一八七〇）年閏一〇月九日に、太政官が当時の「府学」を「中学校」と改称し、京都では、「京都府下中学校」が華族をはじめ士庶民の入学を許可した。ところがその就学年齢は一六歳から二二歳までであり、同時に当時の小学校は「華族以下卒ニ到迄」の者の入学は認めていなかったために、この中学校に彼らの入学を認める「小学舎」が附置された。他方、同じ年の十一月、河原町二条下ルの旧山口藩邸（角倉玄注代官邸跡）に、洋学舎独逸学校が設置されており、プロシヤ人ルドルフ・レーマン（Rudolf Lehmann, 1842-1914）が英語・フランス語・オランダ語・ドイツ語と数学とを教授していた。また、翌明治四（一八七二）年四月にアメリカ人チャールズ・ボードウィン（Charles Baldwin, 1834-86）を教師として、河原町二条下ルの旧

角倉邸に、洋学舎英学校（角倉英学校と呼ばれた）が開校された。さらに、同年一〇月には、フランス人レオン・デュリー（*Léon Dury, 1822-91*）夫妻を教師として、河原町二条上ル高田別院内に仏学校が仮開校され、翌年一月になって智恩院華頂宮旧邸内に正式に開校された。さらに明治五（一九七二）年四月には、イギリス人ホルンヴィ・イーヴァンス（*Hornby Evans*）を教師として、土手町丸太町の旧岩倉邸に新英学校が開校された。¹²明治六（一八七三）年二月になると、これら欧学舎と、その生徒に和・漢学を教える「立生校」は「仮中学校」と総称され、さらに三月になると「筆算局」も併設された。その後、この仮学校は一八七九（明治一二）年になって修業年限四年制の京都府中学校となった。¹³

このような明治初期の京都における学校制度の創生期にあって、吉岡はその制度の変遷に身をゆだねながらも、研鑽を積んでいった。すなわち、「吉岡美国略伝」によれば、「明治四年現在京都府庁ノアル所ニ京都中学校ノ創設セラル、ヤ、父ノ意ニ従ヒテ其ノ英語学校ニ入り英学ヲ学ビ傍ラ其ノ立生学校ニ於テ皇漢学ヲ修」め、「美国亦一時昼ハ中学ニ夜ハ小学校ニ通ヒ、既ニ史記ノ素読ヲ修メシモノガ小学校ニ於テ国史略ノ素読ヲ授ケラル、事トナリシモ、半年位ニシテ斯ノ如キ事ハ中止セラレタ」という。本文中の「英語学校」は欧学舎の支舎である英学校であり、その欧学舎と併合された「立生校」でも同時に学び、¹⁴その上でこの時わずか九歳であった美国はその年齢と士族であったために、普通の小学校ではなく、中学校に附置された小学舎にも一時的に在籍したのである。

また、「英学校ノ教師ハ当初極メテ僅カノ期間一時独人教師之ヲ兼ネシモ間モナク旧米国海軍士官 Charles Baldwin（後各学校ニ歴任、鹿児島造士館教師タリシ時死去。同地ニ埋葬、後移

サレテ墓ハ今春日野外人墓地ニアリ）来リテ専ラ此ノ任ニ当レリ」として、この「吉岡美国略伝」の筆者はボールドウィンの動向に強い関心を示している。

このボールドウィンは⁽¹⁵⁾、アメリカのマサチューセッツ州ボストン近くの村に生まれ、商船の船員を経験した後、海軍に入隊し、南北戦争に参加した。三六歳まで軍艦乗り組み海軍士官（副将次席運用方）であったが、一八六九年に辞職し、来日した。長崎に上陸の後、直ちに神戸に来た。一時期神戸居留地にあったレーマン・ハルトマン商会のレーマン（Carl Wilhelm Heinrich Lehman, 1831-74）⁽¹⁶⁾のところに身を寄せたが、明治三（一八七〇）年には大阪で私塾を開き、航海術、測量、数学を教えた。彼は公お雇いの希望をもっていた。一方で京都の欧学舎は、その学生数の増加に対応するために、教員の採用を考慮していた。その結果、二〇〇枚のメキシコ・ドルの月給で英語および数学の教師として雇用されることとなった。明治四（一八七一）年三月二十五日から一年間の契約であった。

当時この英学校では、ボールドウィンは初級の授業で会話、習字から始め、最終的にはバレーの歴史書を頂点とする「星学、地理学、リードル、会話書、翻訳、算術」などを教えた。この英学校ではその英学の学習が英会話からはじめられたことは注目すべきであろう。彼は熱心な教育者であり、生徒の学力の進歩は著しく、彼らから信頼されていた。そして、文部省交付の官費支払が停止される一八七四（明治七）年四月まで継続して雇用された。

その初期の教え子の一人に平井金三（一八九一六）がいた。彼は京都の儒者平井春江の子供で、ボールドウィンに学んだ後、一八八二（明治一五）年頃に外務省文書局に出仕し、一八八五（明治一八）年に京都に戻り、オリエンタル・ホールを創立した。同校は一時期は同志社に拮抗

する教育機関となった。後に東京外国語学校、東京高等師範学校、早稲田大学、慶應義塾、第一高等学校で教鞭をとった。彼は仏教保護の立場で英学を講じ、言語学者として著名となった。⁽¹⁷⁾ また、浅田栄次(一八六五―一九一四)は、徳山生まれで、ボールドウィンに学んだ後、第一高等学校を経て、一八八七(明治二〇)年に東京帝国大学に入学するも、翌年退学し、アメリカのウエスタン大学、ユニオン神学校、シカゴ大学大学院を経て、一八九三(明治二六)年帰国し、東京高等商業学校、東京外国語学校、中央大学などで教鞭をとった。⁽¹⁸⁾

また、一八八八(明治二二)年に大阪南メソヂスト教会でW・R・ランバスから受洗し、一八八九(明治二二)年に関西学院神学部に入學した芦田慶治もまた、一八七八(明治一二)年に仮学校から正式の中学校となった京都府中学校に入學し、ボールドウィンから教えを受けた。彼の卒業は一八八二(明治一六)年の卒業である。⁽¹⁹⁾ 従って、吉岡は芦田の先輩であり、一八七八年度の一年間は、この京都府中学校にともに在籍していたことになる。

その他、ボールドウィン末期の教え子にも小泉八雲―彼もまた一八九四(明治二七)年一月から一八九六(明治二九)年八月まで『コーベ・クロニクル』の社説を担当していた―の門下で第三高等学校で教鞭をとった伊藤小三郎や東京帝国大学で教鞭をとり日本の言語学の発展に寄与した藤岡勝二などがある。このように京都の英学校は多くの言語学者を排出したのである。

ボールドウィンは、一八九二(明治二五)年には高知県尋常中学校英語教師に招かれ、さらに一八九五(明治二八)年十一月に鹿児島造士館高等学校教師に招かれたが、翌年六月在職中のままその生涯を終えた。その墓は、吉岡の指摘の通り、当初神戸の原田の森近くの「春日野外人墓地」に埋葬されたが、現在では日本人の妻とともに神戸再度山・修法ヶ原外国人墓地に改葬さ

れている。⁽²⁰⁾

ところで、吉岡が教育を受けていた時代は学校教育における皇学者と漢学者との間の指導権争いにすら決着がついていない時期であり、⁽²¹⁾さらに例えば、学校の休日について「年中の休は毎日曜日、之は外人教師が大いに主張したところ、当時はキリスト教に関係があるというので反対意見が強かったにも拘らず之を認めたのである。東京大学でも問題になったのであるが、南校は認めて居た」⁽²²⁾とされるように、わが国の教育へのキリスト教の影響の是非についてもその議論に決着がついていない時期でもあった。

一八七七(明治一〇)年二月、京都滞在中の明治天皇は「仮中学校」を訪ねた。その際、吉岡は表彰された。当時の吉岡は立生学校生徒であると同時に英学校生徒でもあったため、「立生学校生徒」として『日本政記』と『十八史略』を、また「英学校生徒」として『トッドハンター代数学』⁽²³⁾と『スタンダード辞書』とを優等賞の副賞として受けた。このように吉岡は和・漢学だけでなく英語にも優れた成績を残したことになる。

欧学舎と立生校の総称であった仮中学校は、すでに指摘したように、一八七九(明治一二)年になって京都府中学校(府立第一中学校の前身)として開校された。そのため、吉岡は第一回卒業生として一八八〇(明治一三)年三月にこの京都府中学校を巣立った。その時の事情について「吉岡美国略伝」は「美国二四歳ニシテ父ヲ失フ、京都八府ノ中学校在校中人手不足ノタメ既ニ助手等ヲナシ居シガ、卒業後ハ工部省ノ所管ナル工部寮(後工部大学)⁽²⁴⁾ニ入ラント志シ、熱心準備シアリシモ、茲ニ至リテ家庭ノ事情京都ヲ退リ離レ得ザルモノアリ之ヲ断念シ」と書いている。そこで、吉岡は卒業と同時に、京都府中学校の助教諭として勤務し、彼の在籍は一八八五(明治

一八)年六月までの五年間に及んだ。「吉岡美国略伝」によれば、「其後彼ノボールドウィンハ一時他ニアリシガ又帰り来リテ京都中学校ニアリシガ一日美国ニ神戸ニ於テ『兵庫ニュース』ナル外人新聞ガ翻訳者ヲ求メ居ルヲ告ゲ其ノ之ニ応ズル意志ナキヤヲ問フ。美国又之ヲ望ミ考試ヲ經テ採用セラレ神戸ニ帰ル」。一八八五(明治一八)年七月であつた。⁽²⁶⁾

ボールドウィンの情報で就職することになったこの兵庫ニュース社⁽²⁷⁾は、一八六八(明治元年)、神戸最初の英字新聞であつた『ヒョーゴ・アンド・オーサカ・ヘラルド』の植字工であつたポルトガル人のフィロメノ・プラガが海岸通第八キャロルビルディング(後の日本郵船ビル)を本拠に週刊新聞 *HIOGO NEWS* を一九六八年五月一五日に創刊した。社主は当初ジェームス・E・ウエンライトであり、同紙はアメリカ領事館の公示掲載紙であつた。一八六九年五月六日からフランク・ウォルシュ(F. Walsh)に引き継がれている。吉岡が就職した当時はウォルシュは発行人で、編集者は神戸の裁判所に勤めていた「代言人」クリーグ(J. Creagh)であつた。⁽²⁸⁾ 吉岡の仕事は「主トシテ京阪神戸邦字新聞ノ記事ヲ抜粹シ、之ヲ英訳シテ、兵庫ニュースノ資料トナシタルモノ」であつた。すなわち、例えば、*HIOGO NEWS* の「Translations from the Native Papers」の欄には、邦字新聞の英訳が掲載されている。一八八六年七月二六日付けの *HIOGO NEWS* を見ると、この「翻訳」欄には、『神戸又新日報』(一八八四年創刊)『大阪日報』『珍外電報』『毎日新聞』などの記事の英語訳が掲載されている。おそらく、このような記事の資料作り、場合によっては、彼の英訳そのものが掲載された可能性は十分あるであろう。ただ、このような仕事は長続きしなかった。吉岡は健康を害したために、その勤務は一八八六(明治一九)年一〇月までのわずか一年間であつた。

二 神戸時代 ― 受洗まで

この病氣療養中に吉岡の脳裏に思想上の問題が浮かんた。「吉岡美国略伝」によれば「予テ京都／府／中学校在任中ヨリ其心ニアリシ事ナルガ、西洋ノ智識ノ輸入ト共ニ我国ノ思想界ニ混乱を生ジ道德上ノ觀念ノ悪化スル傾向ヲ強ク感ジ、ソレ迄只管西洋文化ノ智識ヲ持入レン事ヲ世間一般ノ考ヘ居リシガ如ク美国モ亦此事ノミヲ念トナシ居リシガ、茲ニ於テ一種憂國ノ念ヲ生ジ、殊ニ新聞界ニ従事スル事ニヨリテ此念愈々強ク刺激セラル、ニ至リ。種々西洋ノ事情ヲ研究セシ結果西洋文化ニハ亦宗教ヲ伴フ事ニ着目シ、西洋各国ノ宗教ノ事情ヲ研究セントヲ志シヌ」。

また、トウソンによれば、吉岡は『重苦しい責任というプレッシャーのもとで、私はときおり人間以上の力を持った見えざる手の必要を感じた。母の教えに従って、信頼できる神々に助けを求めた。時折、仏教の説法を聞き、興味をもって仏教書を読んだ』。しかし、無味乾燥で命の輝きのない抜け殻のような仏教に、若き吉岡の探求心は満たされなかった。彼は、ベイン (J. Bain)、スペンサー (H. Spencer) そしてダーウィン (C. Darwin) のような著者の作品を読んだ。これらは彼自身の言葉によれば、彼の『若き懷疑に満ちた心には、仏教よりも納得のいく』ものであった」。当時は、彼らの思想がまさにわが国において受け入れつつあったまさにその時代であった。

このように伝統的な日本の文化・思想・宗教に育った当時の青年が西洋の文化・思想・宗教を学ぼうとする際にしばしば陥る心の葛藤を、吉岡自身も経験したということである。ただ、吉岡は西洋の知識の導入がただ単に日本の思想にだけではなく、さらに日本の道德に与える悪影響をも懸念するなど「道德」の重要性を強調した。その上で、その西洋文化の背後にある宗教にも強

い関心を示したのである。西洋文化のもつ科学技術に大きな関心を示し、その修得によって「立身出世」を夢見た当時の多くの青年たちとは異なり、中学校卒業後工学寮に進学しようとしたもののそれを断念した吉岡が、西洋文化の根底に横たわるキリスト教の存在に気付いたことは注目に値しよう。

それだけでなく、吉岡はさらに一歩進めて、「其迄英学上ノ知識トシテ聖書ニ関シテモ断片的ニ其記事ヲ見タルコトモアリシガ、之ヲ全般的ニ知ルニハ及バザリキ」ことに気付き、「此時ニ至リ聖書ヲ調査セントシ尚新シキ雑誌等ニヨリテモ基督教ノ知識ヲ或ル程度知り、自ラ之ヲ読ミ考フル中、之ヲ尋ヌル人無ク、新聞社関係ノ外人ニハ宗教方面ニハ殊ニ無関係ノモノ多ク兵庫ニウス社員中ニハ基督教ハ嘘ナリト放言スルモノモアル状態ニテ一般在留外人モ宗教心ハ薄クユニオン・チャーチ⁽²⁹⁾ハアリシモ、少数ヨリ礼拝参列者ナク美国ノ如キ教会ノ存在スラ知ラザリキ」として、神戸居留地在住の外国人ですら信仰心が希薄であったことに気付いていた。

このように強い探求心を持った吉岡にキリスト教との出会いの機会がおとずれた。「其頃計ラズモ兵庫ニウス社ニ如何ナル理由ニヨリテカ、又ソレ氏名モ美国ノ記憶ニハ存セザルモ、一青年ノ訪問ヲ受ケ、会談中、話俄ニ宗教ノ話ニ及ビソノ青年ハ宗教トハ関係アル青年ニハアラザリシガ、ランバス氏の夜学校（ランバス氏が宣教部ニ於テ夜学校ノ開始シタル直後ノ事ナリキ）ノ事ヲ語り、基督教ニ就テ調査スルナラバ、ランバス氏ニ会ヒテハ如何ト勸メラレタリ、但シ右ノ青年モランバス氏ヲ知り居ルモノニアラザリシカバ、或手筋ヨリ当時洲本ニ塾ヲ開キ英語ヲ教ヘ、ランバス氏モ宣教部開始勿々其塾ニ教エタルコトアル岡健太ガ、其頃神戸ニモ塾ヲ開キ（鶴崎庚午郎⁽³⁰⁾等モ此塾ニ学ビシコトアリ）居ル事ヲ知り、此人ニ紹介セラレ、岡氏ト会談セシ結果ランバ

スト紹介セラレ」た。

岡⁽³²⁾はウヰルミナ女学校校長であつたドレナン⁽³²⁾からJ・W・ランバスのことを聞き、教えを受けるようになった。J・W・ランバスは一八八六（明治一九）年七月二五日にデュークス⁽³³⁾とともに神戸に着任し、居留地四七番で英語夜間学校を開設し、伝道を開始したところであつた。⁽³⁴⁾

このようにして吉岡は「明治一九年七月ノ或日曜日昼前現在ノ大丸百貨店東側、三菱銀行南隣ノ地ニアリシユニオンチャーチノ南隣ニアリシ（四十七番館）南美以宣教部ーランバス此処ヲ住居トシ、茲ニ教会ヲ始メタルナリ）ーニ岡氏ノ事前ノ紹介状アリシ後、美国ハ单身ランバスヲ訪ネ、訪問ノ理由ヲ話シ、基督教ニ就キ話ヲ聞キタキ事ヲ述べ、美国従来ノ略歴ヲモ語り爾後面会ノ都合等ヲモ打合セタリ。当日ハ宣教部ノ礼拝ハ既ニ済ミシ故ニテ美国ハランバスト共ニユニオン、チャーチノ礼拝ノ半頃ヨリ列席。礼拝後分レ帰リシガ、其後ハ随意ニ訪問セヨトノ事ナリシモ当時美国ハ半病人ニシテ、且兵庫ニ居住シ居タル關係上、数回訪ネテ基督教ノ概念ヲ質問セシノミナリキ」。

「同年十月頃ニ至リテランバスハ内海ノ巡回伝道ニ相当多忙ニシテ菟角ニ不在勝ナルモ最初極メテ短期間四十七番館ニ同居シ、間モナク山二番ニ別居セル父ランバスガ相当多忙ニハアレドモ若ランバス程ニアラザレバ、其方ニ面会ニ行ク様ニト紹介セラレ、ソレヨリ山二番ニ一週一度位通フ様ニ至ル⁽³⁵⁾。ここでも指摘されているように、吉岡が新聞社を辞めた一八八六（明治一九）年一〇月には、J・W・ランバスはデュクスを伴い淡路への伝道を行っている⁽³⁶⁾。

このようにして、吉岡は一八八六年七月の最後の日曜日（二五日）にJ・W・ランバスを最初に訪ね、W・R・ランバスが来日後は、彼からも教えを受けるようになっていった。すなわち、

吉岡は「老ランバス時ヲ決メテ聖書講義、日曜日ニハ自宅礼拝ヲ為シ、此等ノ集会ニ案内セラレ、大抵欠カサズ之等ニ出席」したのである。しかし、吉岡は「最初ハ宗教ヲ求メル信仰アリテハナク、日本従来ノ青年ノ考、憂国ノ志ヲ持ツ所ニ発シタルモノナリシガ菟モ角ソノタメニ聖書ノ講義ヲ聞カントシテ通ヒ居タ」に過ぎなかった。「然ルニ集会ニ参列シ或ハ個人的ニ対談スル中、老ランバスト美国トノ親交深クナリ、老ランバスモ当時美国ガ兵庫ノ私宅ニ於テ多少ノ英学生ニ教授シ居リシ事ヲ聞キ、此所ヲ訪ヌル様ニ至ル。斯クシテ漸次親シミ深クナルニ伴ヒ、老師ノ氣分モ判リ、其人格ノ普通ナラヌ事ヲ感ジ、依ツテ我国ノ人々ヲ教化シテ其ノ西洋文化ヲ導入スルニハ基督教ニ依ラネバナラヌトノ憂国ノ考ヘト共ニ、個人的信仰ノ宗教、靈ノ救済ニ思ヒ及ブ様ニナリ、漸ク考ガ変ル」。このように吉岡は、当初、キリスト教に対して、思想、道德的観点からその接近を図ったが、J・W・ランバスの人格に触れることで、キリスト教信仰への道にたどりついたのである。

「ソノ動機ハ全ク美国ガ老ランバスノ人格ニ動かサレシモノニシテ、全ク老ランバスハ基督教ノ権化ナリト感ズルニ至リシナリ。(老ランバスハ能弁ニアラズ、唯基督ヲ顕ハシ得タル人ナリト思ハレ)進ンデ基督教徒トシテ洗礼ヲ受ケント志望ヲ起シ、ランバス老師ニモ勧めラレ、当時ノ制度タリシ六ヶ月ノ試中ニ入り、礼拝、祈祷会、聖書研究会ニモ進ンデ出席スルニ至レリ」。

このようにキリスト教への関心が高まる中、「健康モ恢復シ漸次基督教ニ熱中スルト共ニ新聞事業ニ対シテハ興味を失ヒ、入社当時希望セシ事モ協ハズ遂ニ辞職ヲ決心シ、人心教化ノ方面ニ尽力セント思ヒ教会ニ身ヲ投ズル積リニテ」一八八六(明治一九)年一〇月に吉岡は、すでに指摘したように、新聞社を辞めた。その時「老ランバスニハ定マレル通訳者無ク夜学生其他ヲ其都

度頼ミ居ル状態ナリシ処へ美国ガ来リシ故相互ノ協定ニヨリテ其専任通訳者トナリ、当時尚信徒ニハアラザリシモ、礼拝其他老ランバスノ関係スル主ナル儀式等ハ常ニ之ヲ引受クルニ至リ、其中試中期間モ終レリ。尚モ新聞社辞職直後ニ斯克ナリシニアラズ、二十年夏過ぎ迄ハ特ニ頻繁ニ老ランバスヲ訪ヒシニハアラズ。二十年夏山二番ヲ訪ヒ、二十一年三月試中ヲ終リ受洗セシナリ」。このようにして、吉岡は長谷基一、坂湛とともに、一八八七年三月四日神戸中央教会仮礼拝堂で、J・W・ランバスから受洗した。

(続く)

注

(1) 原清「忘れ得ぬ恩師(一) 吉岡先生―全生涯を学院に 涙で見守るリンチ 愛と信仰の古武士的紳士―」関西学院同窓会『母校通信』No.10、一九五三年、五頁。

(2) 関西学院『関西学院六〇年史』、一九四九年、八九―九〇頁

(3) 吉岡美清編『父の倂』一九五八年、私家版(本節の本文中の()の数字は、この本からの直接引用頁数である)。その他教えを受けた人々による吉岡の評価を列举しておこう。

・「維新のきびしい時代に厳格な武士の家に育って、軽々しく愛情を表わすことが許されなかった上に、特に戒律の厳しいメゾジスト派のキリスト信者となり、自我を捨てて神のため隣人のためにこれ努める」「父は熱烈なキリスト者でしたが、同時に実に強い愛国心と皇室に対する忠誠心の厚い人でした。その意味で父の教育勅語の捧読は熱意のこもったもので、父の得意とした誇りとする処でありました」

(吉岡美清、一一二頁)。

- ・「自愛の念に充ちたる人」「ペスタロッヂの教育の理想を、現実に実現しておった」「考えしめられたることは『人間は元来何のためにか存する』『人生の意義乃至その目的は如何』『名誉や金銭の奴隷となつて終生することは価値がない』等々の問題であつた」(二三―二四頁)。
- ・「先生から親しく受けた御薫陶は『なんじら人を審くは審かれざらん為なり』との聖句に尽されていることである」(四頁)。
- ・「ご自分を隠しておられる方でありました。…その隠れたところに、先生の人格の誉れ、即ち高さと深さとが偲ばれます」(六頁)。
- ・「先生は、深い信仰と修養の結果体得されたものがわれわれを動かしたものであろう」(二六頁)。
- ・「吉岡先生担当の修身の試験に私は聖人とは孝孟の教えにキリストの教えを搗き混ぜたものか? という頗る皮肉な答案を書いた、…『芝は物の裏を見る』という院長先生の評言を聞く」「高い風格のある武士的東洋的教養にキリスト教的訓育を加えて無言の感化を内外に与えて止まなかつた」(四六―四七頁)。
- ・「幕末の烈士大塩忠斎の血を継がれたという先生は、ほんとうに古武士のような方で、日常の御生活も端正そのもので…基督者としての溢れるような愛情はほんとうに心打たれるものでした」(五一頁)。
- ・「よく理の分つて呉れる親爺。全く優しい好い親爺」(三五頁)。
- ・「当時の学院のモットー、公明正大、正義公道の氣風が全生徒に満ち満ちていまして、全生徒は上を敬い、下を愛し…」(五三頁)。
- ・「温容にして嚴然たる古武士」(六二頁)。
- ・「慈父そのものの限りなき愛と慈しみをも体験している」(六七頁)。
- ・「慈悲深き第二の父とも仰がる院長」(七一頁)。
- ・「儒者的風格の紳士」「東洋君子の国の紳士」(七七―七八頁)。

・「分の悪いキリスト教育に専念された尊い御一生で御座いました」「先生はあまり純粹であられたので俗世間には弱い面もあったと思います」(真鍋たか、八三頁)。

・「キリストの愛を実行した偉大なる教育家」「沈黙寡言の人」「古武士型の人」(中村賢二郎、八四―八五頁)。

・「厳格な方であって、自らピューリタンの信仰を持しておられた」「日曜日の野球の試合を叱責」(八要約) (西山貞、九〇頁)。

・「キリスト教的共同体の家長的地位にあった」(キリスト教学校同盟『日本キリスト教教育史』一九七五年、二三三頁)。

なお、この『父の倅』には投稿者一覧が付されていないので、参考のために以下に掲げる。①吉岡美

清、②小林彌太郎、③松田明三郎(神学部：大正八年卒)、④岩崎愛三(中学部：大正四年卒、大正八年：高等学部商科卒)、⑤家城秀夫(普通学部：明治三九年卒)、⑥H.W. Outer-bridge、⑦矢内正一(高等商業学部：大正一三年卒)、⑧矢田文一郎(神学部：大正四年卒)、⑨皆川治広(普通学部：明治二七年卒)、⑩四方敬一(普通学部：明治四五年卒)、⑪小野忠雄(高等商学部：大正一一年卒)、⑫今田恵(神学部：大正六年卒)、⑬宇野又夫(中学部：大正四年卒)、⑭東晋太郎、⑮定方末七郎(普通学部：明治三三年卒)、⑯青山逸平(普通学部：大正二年卒)、⑰中村金次(神学部：明治三三年卒)、⑱小野豊(高等学部商科：大正五年卒)、⑲折島整(普通学部：大正二年卒)、⑳高橋信彦(中学部：大正一二年卒)、㉑元吉潔(神学部：明治四一年卒)、㉒日野原善輔(普通学部：明治二九年卒)、㉓乾精末(普通学部：明治三四年)、㉔藤田威和男(普通学部：大正三年卒)、㉕亀徳一男(神学部：大正四年卒)、㉖住川熊夫(普通学部：明治四四年卒)、㉗真鍋たか(真鍋由郎の妻)、㉘中村賢二郎(普通学部：明治三四年卒)、㉙西山貞(普通学部：明治四二年卒)、㉚田中貞(神学部：大正八年卒)、㉛井上愛策(神

学部：大正二年卒）、③栗田翼（普通学部：明治四十年卒）、③稲垣最三（文学部：明治四十一年卒）、④木村蓬伍（神学部：大正六年卒）、⑤熊谷鉄太郎（神学部在籍）、⑥神崎驥一（普通学部：明治三四年卒）、⑦竹友安彦（中学部：昭和十四年卒）、⑧磯部忠正、⑨吉岡里枝子、⑩岡田陽子・庄ノ敬子、⑪木村蓬伍「故吉岡美国先生の略歴」

(4) 吉岡美清前掲書、一一三―一四頁。木村は、一八八九年七月一九日、宇部市生まれ。一九歳で受洗。神学部を一九一七年に卒業し翌年留学。エモリー大学神学部および大学院に入り、バチュラー・オブ・ディヴィニティ、マスター・オブ・アーツを取得し、一九二三年に卒業。帰国後、主として牧師として活躍するとともに、本学神学部非常勤講師なども務めた。一九四二年には本学理事に就任、一九六〇年には理事長に就任した。在任中の一九六四年四月二二日逝去（『故木村蓬伍先生 追悼記念式』式次第）。

(5) 吉岡美清前掲書、二〇頁およびキリスト教学校同盟『日本キリスト教教育史』一九七五年、二三五頁。矢内は、兵庫県作用郡作用町生まれ。姫路中学校卒業後、本学高等商業学部を一九二四年に卒業。同年四月より関西学院中学部教諭となり、一九三二年には関西学院高等商業学部教授。一九四四年中学部教頭に、一九四七年新制中学部長。以後、学院の評議員、理事などをつとめ、一九六五年定年退職し、名誉中学部長となる。一九六九年には関西学院理事長（一九七四年）。一九八四年三月二六日逝去（『故矢内正一先生 箕面自由学園・関西学院合同葬』次第）。

(6) 現在までに参考にできる吉岡の生涯について紹介した文献（一次文献を含むものの、辞書・事典類を除く）の内、重要と思われるものは以下の通りであり、本節の執筆に際しては、これら文献を利用した。

①履歴書類

(i) 「履歴書」(明治四二年一〇月一六日現在)普通科職員履歴書 学院史資料室所蔵番号 DBI

4-2✓、以下では「普通科職員履歴書」と称する。

(ii)「履歴書」(中等学校教員免許に関する申請書 学院史資料室所蔵番号／A B-11-2-7✓以下では「申請書添付履歴書」と称する)。

(iii)「吉岡美国 文久二年九月二六日生 当昭和一四年九月、満七七年」

②伝記草稿

(i)「吉岡美国略伝」、これは、原田の森校地の決定までを記述しており、幼少の頃の記述も含め、もっとも詳細なものであり、後の伝記資料の基礎資料となったものと思われる(筆者不明)。本稿の吉岡の伝記部分は、この資料を補足・解説する形式を採っている。

(ii)「吉岡美国ノ功績」(『関西学院五〇年史』準備のために村上謙介が準備した草稿：学院史資料室所蔵番号／A A-2-Y Y)。

(iii) C.J.L.Bates “Memories of Dr.Yoshioka” (一九五八年二月一四日付け文書：学院史資料室所蔵番号／A A-2-Y Y)。

(iv) W.R.L.Lambuth, “Japan Mission: Our Theological Students”, *Annual Report, Board of Missions MECS*, 1888, p.91.

(v) W.E.Towson, “Yoshikuni Yoshioka”, *The Methodist Review of Missions*, New Series, vol. xix, no.3, Sept., 1898, pp.128-34.

③印刷物

(i) 木村蓬伍「故吉岡美国先生の略歴」(『関西学院葬弔辞』、前掲書『父の倂』所収)。

(ii) 廣田佳彦「故中西良夫先生に捧ぐ 関西学院史における日本人指導者の研究―『吉岡美国』研究をその嚆矢として―」(『関西学院キリスト教主義教育研究室』『キリスト教主義教育』第二三号、

一九九四年十一月、六五―七四頁。

- (7) 現関西学院院长山内一郎は『日本キリスト教教育史』中の矢内の吉岡評を参考にしながら、吉岡の信仰を評して「八一八八九年〱暮、ランバス、S・H・ウェンライトらと共に大分に伝道、靈感にうたれた説教に、リヴァイヴァル運動が起った」(『日本キリスト教歴史大事典』教文社、一九八八年、一四七〇頁)として、吉岡の信仰の特徴を指摘している。

- (8) 誕生日については、「普通科職員履歴書」および「申請書添付履歴書」では、「文久二年十月生」となっているが、他の資料では、この生年月日となっている。

- (9) 「吉岡美国略伝」では「京都町奉行組御池屋敷」となっており、「今ノ鉄道二条駅前ニシテ吉岡家ノアリシ処ハ今ハ市電路線トナリ居リ」場所である。

- (10) 長子であったにもかかわらず岩三郎と呼ばれた理由について「吉岡美国略伝」は「信太郎ト称スル養子」と「事情アリテ美国ノ兄トシテ届出シモノ一人」がいたためであると書いている。

- (11) 英学校は当初高田別院内にあったが、学生数の増加で、旧角倉邸に移った。このように英学校が二校併設されたことについて「吉岡美国略伝」は「英学校ノ如キモ一時二校ヲ併置シ其一ハ英人教師其二ハ米人教師之ヲ教ヘタル事モアリ」と書いている。このようにこの「吉岡美国略伝」はその詳しさの点で、吉岡自身の筆になるものでないにしても、直接吉岡から聞き書きした草稿である可能性が高い。

- (12) 欧学舎は、これら独逸学校、英学校、仏学校、新英学校に女紅場(明治五年開設)を加えてた五つの学校を合わせた名称である(『京都府教育史上』、日本教育史文献集成、一九八三年(復刻)三二四―六二頁、とりわけ、三三八頁を参照)。

- (13) 衣笠安喜編著『京都府の教育史』一九八三年、思文閣出版、二六六―六九頁。

- (14) 『京都府教育史上』は、当時欧学舎で外国語を学び、立生(成)舎で皇漢学を兼修する生徒が大変多

かったと指摘している。その理由の一つとして、英学校の授業は、朝七時から八時半までが一等、八時半から一〇時までが二等、一〇時から一一時までが三等、一一時から一二時までが四等、午後一時から二時までが五等であり、冬は一時間遅れであった。吉岡は、その時間の合間に立生舎や小学校に通った。吉岡が「昼ハ中学ニ夜ハ小学校ニ通ヒ」と書いていることから考えれば、当時午後に関講されていた英学校の五等（初級）のクラスに在籍していたことになるであろう（三四四頁）。

ところで、吉岡が入学した明治四年の生徒数は、独逸学校で一三八名、仏学校で七六名、英学校で一〇八名（初級一七名、四等二六名、三等二六名、二等二三名、一等一六名）、新英学校で一二四名であったという（三四〇頁）。また、英学校の秀才として「東伍市八舎長であり、同志社の山本覚馬の門下生であった」、池田潜蔵（後に、京都の府舎密掛九等属となり、ボールドウィンを大気顕象学教師として雇うようになった）、能美織之助、山田虎之助」を挙げている（三四〇頁）。

- (15) この節の記述は、重久篤太郎「チャールス・ボールドウィンー永遠の英語教師ー」（『お雇い外国人⑭地方文化』鹿島出版会、一九七六年、八〇―九二頁）を参照した。

- (16) 弟の Rudolph Lehman (1842-1914) も一八六九年に来日し、兄が大阪で開いたレーマン・ハルトマン商会の顧問となったが、まもなく京都に移り、欧学舎で英語・ドイツ語・数学を教え、一八七一年からは京都で独和辞典の編集を開始し、一八七七年にはレーマン校訂による『和独対訳字林』が刊行された（重久篤太郎「ルドルフ・レーマン」、『お雇い外国人⑤教育・宗教』鹿島出版会、一九六八年）。

- (17) 『日本人大事典』平凡社、一九七九年（復刻）、第五巻、二六五頁。

- (18) 『日本人大事典』平凡社、一九七九年（復刻）、第一巻、五三頁。

- (19) 学院史資料室所蔵の略歴書。芦田は、京都府中学校を卒業した後、帰郷したが、一八八六（明治一九）年に家族とともに大阪へ転居し、その地で受洗した。重久も前掲書において、芦田がボールドウィンの

弟子であったと指摘している。

(20) その墓籍番号はD一区七〇番である。

(21) 前掲書『京都府教育史上』三二四―二五頁。

(22) 前掲書『京都府教育史上』三四一頁。

(23) この『トッドハンター代数学』は、おそらく *Algebra for the Use of Colleges and Schools* (一八五八) であろう。このトッドハンターの翻訳は、関口開訳『代数学』、益田光徳訳『代数学問題』であり、いずれもその邦訳の出版は一八七七年である。吉岡が受け取った書物がこの邦訳である可能性もあるが、受け取った日付が二月であることを考え、また、英学校の賞であることを考えれば、受け取った書物がこの原書であった可能性がきわめて高い。なお、当時はこれら原書が教科書としてしばしば用いられたという。その契機となったのは、トッドハンターにケンブリッジ大学時代に学んだ菊池大麓であった(『日本の数学一〇〇年史』編集委員会編『日本の数学一〇〇年史上』岩波書店、一九八三年、七四頁、八〇頁、一二三頁)。なお、これらの書物は関西学院(大学)図書館に寄贈された吉岡の蔵書目録には現在のところ発見できていない。

(24) 吉岡が進学したいと考えていたこの工学寮の一八七三(明治六)年の「工学寮課程諸規則」によれば「代数、幾何、微積分、微分方程式」が教授され、吉岡が受け取ったこのトッドハンターは教科書として使われたという(前掲『日本の数学一〇〇年史上』七〇頁)。

(25) ボールドウィンは、一八八一(明治一四)年七月になると新任の北垣知事の方針で解雇されたが、その年の内に再雇用されている。その後一八八四(明治一七)年九月から一八八七(明治二〇)年三月までは京都府女学校の英語教師を、さらに、京都府尋常中学校教師として、一八九一(明治二四)年七月までは在籍している(前掲書『京都府教育史上』、三五五頁、重久篤太郎前掲書、八八頁)。また、ユ

ネスコ東アジア文化研究センター『資料御雇外国人』小学館、一九七五年、四一三頁も参照のこと。

(26) この時代の吉岡の住所は後に指摘するように兵庫に住んでいたという以外詳細は不明である。

(27) 堀博・小出石史郎訳『神戸外国人居留地』（神戸新聞総合出版センター、一九九三年、七三―八二頁）、神戸市史紀要『神戸の歴史』（第四号、一九八一年、八月、七二―七四頁）、『歴史と神戸』（No. 一一七、一九八三年四月、二四頁）を参照した。一九九九年本社の焼失で再起できず、コーベ・クロニクル紙に買収・吸収された。最終号は、一九九九年二月であった。

(28) 『Japan Directory 幕末明治在日外国人・機関名鑑』第八巻、ゆまに書房、一九九六年復刻出版（KOBE DIRECTORY, p.50）。この二名に加えて、一八八六年にはこの新聞社に、W.G.Johnson おもむ J.M.V.Ribeiro が雇用されていた。

なお、この書物によれば、関西学院が原田の森の購入に際して、その資金の提供をしてくれた Hong Kong & Shanghai Banking Corporation の代表者（Acting-Agent）は、J.F.Broadbent（神戸滞在期間：一八八七―八八）、R.Home Cook（神戸滞在期間：一八八九―九〇）である。『関西学院百年史 通史』（I）では「居留地二番にあった香港上海銀行神戸支店の支配人に依頼したところ、ランバスの熱意と人格を信用した支配人は直ちにこれを快諾し、無担保で二、〇〇〇円の貸付をしてくれた」（九三頁）と書かれているだけである。

(29) ユニオン・チャーチ（正式には、兵庫・ユニオン・プロテスタント・チャーチ）は、神戸居留地四八番にあり、一八七二年に建てられた。また、三七番地にはカトリック・ミッションが四一番地にはその学校があった（『関西学院百年史 通史』I、七二―七七頁）。

(30) 鵜崎庚午郎（一八七〇―一九三〇）は、姫路藩士の家に生まれ、小学校卒業後、代用教員となっていた。一八八六年七月にJ・W・ランバスの開いた夜間英語学校にW・R・ランバスは同年十一月二六日

に「読書館」を付置した。この読書館は八七年一月四日にパルモア英学校と改称された。鵜崎はこの読書館に一八八六年に入学した。彼は一八八七年にはW・R・ランバスより受洗し、一八八八年に青山学院神学部に入學、八九年に創立した関西学院神学部に移学した。卒業後、神戸栄光教会牧師、京都御幸町教会牧師、第三高等学校教授、関西学院教授などを勤めた(『日本キリスト教大事典』一七〇頁)。

(31) 岡健太(一八五八一—一八九一)は、豊後国東国東郡安岐町生まれのメソヂスト教会信徒伝道者(『日本キリスト教大事典』二三八頁)。

(32) ドレナン(A.M.Drennan, 1830-1903)は、アメリカのカンバーランド長老キリスト教会夫人宣教師として、一八八三年大阪に着任し、大阪のウエルミナ女学校(現在の大阪女学院)の創立に加わり、八年の創立時に校長に就任していた(『日本キリスト教大事典』九六七頁)。

(33) デュークス(O.A.Dukes, 1845-1930)は、南カロライナ州生まれで、ヴァンダービルト大学で学ぶ。一八八四年にアメリカ南メソヂスト監督教会の医療宣教師として中国へ派遣され、一八八六年にJ・W・ランバスとともに来日し、瀬戸内海地方の伝道に大きな役割を演じた。関西学院、パルモア学院の創立に貢献した。一八九三年にミッシオンを退職したが、日本に留まり、神戸へ高等商業学校へ現神戸大学経済学部へなど公立・私立の学校で英語教師として働いた。墓地は現在神戸再度山修法ヶ原外国人墓地に埋葬されている(『日本キリスト教大事典』一九八八年、教文館および武内博編著『来日西洋人名事典』日外アソシエーツ、増補改定版、一九九五年)。

(34) 『関西学院百年史 通史』I、四六頁。

(35) この文章では「父ランバスが相当多忙ニハアレドモ若ランバス程ニハアラザレバ、其方ニ面会ニ行ク様ニト紹介セラレ、ソレヨリ山二番ニ一週一度位通フ様ニ至ル」とある、この文章を一読すると、吉岡は当初若ランバスに教えを受けたが、その若ランバスが忙しくなったので、山二番に移居した「比較的

多忙でなかった」老ランバスに教えをうけるようになったと読める。しかし、吉岡が最初（七月）に出会ったランバスは老ランバスに違いなし、岡の依頼によって淡路伝道をしたのも老ランバスであった。であるとする、この文章の意味は、表一で示された資料等から判断すれば、以下の通りであろう。老ランバスは七月二五日に着任後、一時期「鯉川筋の西側のデイヴィジョン・ストリート」に居住し、デュークスが居住する居留地四七番に英語夜間学校を設置した。吉岡はこの四七番を訪ね、以後この地でランバスから教えを受けた。十一月二四日になって若ランバスが神戸に到着後、一時期ランバス父子はこのデイヴィジョン・ストリートに同居した。若ランバスは十一月二六日には四七番の英語夜間学校に読書館を併設した。吉岡はこの読書館で若ランバスからも教えを受けるようになった。ところが、若ランバスが忙しくなるにつれて、ランバス父子が翌年一月に転居した山二番を訪ね、老ランバスから教えを再びうけるようになった。

このような理解の難点は、老ランバスの住む「其方△山二番▽二面会ニ行ク様ニト紹介セラレ」という文章が上記の理解に抵触し、むしろ逆にこの文章が吉岡が最初に接したのが若ランバスであったということを示唆していることになる。

このような解釈に立つのが廣田である。彼によれば「“Palmore Reading Room”を自宅に開設するW.R.Lambuthに出会うことになる。…その後吉岡はたびたびW.R.Lambuthのもとを訪ね、しばらくして彼の父J.W.Lambuthに紹介された」（六七頁）。しかし、この解釈に従うと、一八八六年七月に岡の紹介状をもって訪ねたランバスが若ランバスとならざるを得なくなり、これは明らかに事実と異なる。従って、全体から判断すれば、新資料がでてこない限り、前者が正しいといえよう。

いずれにせよ、その後、三月になってデュークスが広島に転出すると、W・R・ランバス（若ランバス）一家はその居留地四七番に転居した（『関西学院百年史』通史編Ⅰ、七四―七五頁）。従って、その

後は資料からも明らかなように、「間モナク山」二番二別居」した老ランバスはその地を中心に活動し、若ランバスは居留地四七番を活動の拠点とした。

(36) 一八八六年二月三十一日の第二回「クォーター・カンファランス」で宣教活動地域の分担が、神戸地区W・R・ランバス、広島地区がJ・W・ランバス、大阪・琵琶湖地区がO・A・デュークスと決定されたが、それ以前は、この例のようにJ・W・ランバスとデュークスが二人で宣教活動をしたと考えられる(『関西学院百年史 通史』Ⅱ、五八九頁)。

表1 ランバス父子等関連年表

1886. 7.25	J. W. ランバス (老ランバス: 56歳) と O. A. デュークス 神戸着任
	J. W. ランバス 英語夜間学校を開設
9.17	A. W. ウィルソン 監督の司式で日本伝道部開設式
10. 2	ジャパンミッション四季会 (第1回) 最初の改宗者 鈴木愿太
10	洲本の岡健太の英学校に J. W. ランバス (老ランバス) と デュークス が訪問
10	砂本貞吉の広島英和女学校創立式典に J. W. ランバス (老ランバス) 招かれる。
11.24	W. R. ランバス (若ランバス: 32歳) 神戸着任
26	W. R. ランバス (若ランバス) 居留地47番 英語夜間学校に読書館を開設
12.31	ジャパンミッション四季会 (第2回)
	巡回区の決定: 神戸区: W. R. ランバス (若ランバス)
	広島区: J. W. ランバス (老ランバス)
	大阪・琵琶湖: O. A. デュークス
1987. 1. 4	英語夜間学校をパルモア学院と命名
1	ランバス一家山二番に転居
2. 4	「目下居留地四七番に住居なす米国人ドクトル、ランバス氏は以前香港に於て私立病院を開き居り昨年末当地へ来りたるが不日居留地に私立の普通学校を建設し内外の青年子弟を教育する筈…」『神戸又新日報』
3	デュークスが広島に転出後、W. R. ランバス (若ランバス) 一家居留地四七番に転居。
9.13	「当港居留地四十七番館に居留する米国人ドクトル、ランバス氏は此度和歌山中学校英語教師に傭聘せらるゝの約條整ひ向ふ一年許は同校に奉職する目的のよしまた氏は右和歌山県へ赴くまでは余暇を以て予州宇和島に到り学事上に関する演説をなす見込にて昨日同地行の便船に乗り組み出発せり」『神戸又新日報』
9.13	「下山手通二番館にランバス夫人が夫人学舎といふを設け明十五日より内国婦人のため英語、算術、習字等を無謝儀にて教授する由にて其教授時間は午前の分は九時より午後の分は二時より始むるとのこと」『神戸又新日報』
<i>Japan Directory 1887</i>	
	Division Street J. W. ランバス (老ランバス) 夫妻
	W. R. ランバス (若ランバス) 夫妻
47番	O. A. Dukes
山2番	J. W. ランバス (老ランバス) 夫妻
	W. R. ランバス (若ランバス) 夫妻
1988. 6. 5	「語学并科学教授…山二番館…アール、ダブリュ、ランバス」『神戸又新日報』
<i>Japan Directory 1888</i>	
47番	O. A. Dukes
山2番	J. W. ランバス (老ランバス) 夫妻
	W. R. ランバス (若ランバス) 夫妻
<i>Japan Directory 1889</i>	
山2番	J. W. ランバス (老ランバス) 夫妻
山39番	O. A. Dukes 夫妻